

仏陀の視線

引 田 弘 道

1. はじめに

羅什訳『妙法蓮華経』普門品には視線に関する興深い記述がある。ここでは観世音菩薩の名前を称えれば、夜叉や羅刹も人間を悩まそうとやって来て邪悪な眼で我々を見ることが出来ない、というものである。

若三千大千，国土満中，夜叉羅刹，欲来悩人，聞其称観世音菩薩名者。是諸悪鬼，尚不能以，**悪眼視之**。(大正9，56c)

対応する梵本では、

sacet khalu punaḥ kulaputrāyaṃ trisāhasramahāsāhasro lokadhātur yakṣarākṣasaiḥ paripūrṇo bhavet 'valokiteśvarasya mahāsattvasya nāmadheyagrahaṇena duṣṭacittā draṣṭum apy aśaktāḥ syuḥ / [Sps: 440, 1-3]¹⁾
(善男子よ、またもしこの三千大千世界が夜叉や羅刹らで満たされたとしてもアヴァローキテーシュヴァラの名前を聞くことで、邪悪な心をした彼らは[我々を]見ることさえ出来ないであろう。)

反対に、同じ『妙法蓮華経』普門品には、

具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故頂礼 (大正9，58b)

と、一切の功德を備えた観世音菩薩が慈悲の眼で衆生を見渡すという全く反対の表現もある。対応する梵本でも、

sarvagunāpāramiṅgataḥ sarvasattvakṛpamaitralocano /
guṇabhūta mahāguṇodadhī vandaniyo avalokiteśvaraḥ // (26) [Sps: 458, 5-6]
(あらゆる徳の完成に至り、あらゆる生類に慈悲の視線をもち、徳の存在であり、徳の大海である、アヴァローキテーシュヴァラを頂礼すべきである。)

このような全く相反するものでありながらも、眼の持つ力に着目したのは『法華経』という大乘仏典に限ったことではない、古くはインドのヴェーダ聖典、さらにヒンドゥー教の聖典に認められる。Gonda [1969] はヴェーダ聖典を渉猟し、視線の持つ機能を詳細に分析した。そこでは、マントラとともに視線を対象に向けると、ある種の効果をもたらすというものである²⁾。例えば、雨乞いの儀式で、バラモンが雲に彼らの視線を固定し、マントラに固有の力を雲に振り向けようとしたり、マントラ詠唱者が視線を雲に固定し、雨を降らせて大地を喜ばせようとしたりする。これはマントラや特別な言葉の力を、見ることにより、対象に伝達するものである。つまりマントラや特別な言葉を伴った視線を対象に投げかけると、大きな効果を与えるのである³⁾。

また相手を怒りを含んだ眼で見ることにより、相手を滅ぼすことも可能である。最高神に怒りを含んだ眼で見られた (nirīkṣaṇa) アスラは、その神の威力によって焼き尽くされ、灰にされてしまう⁴⁾。怒った力ある存在の眼から出る怒りに満ちた視線は恐ろしく耐えられないものだという考えは広く支持されている。例えば「毒の目を持つもの」(drgviśa, drṣṭiviśa) は「蛇」を意味する⁵⁾。カーマ神がシヴァ神

の怒りに触れ、シヴァ神の第三の目から出る光線によって焼き尽くされ、「身体をもたない神」(Anāṅga)と呼ばれるようになったことは有名である。

反対に、友情、契約、友好の神であるミトラ神の眼が対象に向けられると、対象に内在する邪悪な影響力を鎮める効果があるとされる。祭官が祭祀者を「ミトラ神の眼」で見るとは、とりもなおさず、ミトラ神の概念に内在する慈悲、友情、慈善の心を当該の相手に移管することを意味する。というのもミトラの眼は邪悪でなく、柔和で、吉祥であるからである⁶⁾。

Gonda [1969: 55, 63] が指摘するように、タントラ文献においても、視線の効力は重視されている。パーンチャラートラ派の Lakṣmī Tantra では、ラクシュミー女神が視線を投げかけると、神々の群れは繁栄力を得る、反対に投げかけられなかった daitya らは力を消滅する、とある。

tayāvalokite devavarge śriyam upeyuṣi /
tayānavekṣite daityavarge caiva parājite // (LT 1.33)

彼女(ラクシュミー女神)によって見られた神々の群れは力を得た。
彼女によって見られなかったダイトヤの群れは打ち負かされた。

視線の力を持つものは神に限定されない。修行を積んだ行者であれば、視線の力を発揮することができ、マントラの持つ力を十分に活かすことが可能となる。

jīvann eva bhaven muktaḥ punīte cakṣuṣā jagat /
siddhāḥ syus tasya mantrās te laukikā vaidikāś ca ye // (LT 24.42)

生前解脱している行者は視線によって世界を清める。
彼のマントラはヴェーダのものであれ、世俗のものであれ、成就するであろう。

以上述べた視線の持つ力を強調する文献の一つとして、今回、11世紀のカシュミールの詩人、クシェーメンドラが編纂した『菩薩の物語の如意の蔓』(Bodhisattvāvadānakalpalatā = Avk) を中心にその使用例を概観してみたい。この文献はカシュミールの説一切有部律と関係が深いとされるが、現存する文献とまったく同一のものではなく、カシュミールの有部系統の、何らかの文献を源泉としているものであろうと推察されている。

2. Avk に見られる仏陀の視線

この作品中に見られる仏陀の慈愛に満ちた視線の効力の用例はいくつかのカテゴリーに分類出来る。

第一に、仏陀の視線は恐ろしい物質を善なる物へと変え、人々の不安を取り除く力があるとされる。偉大な人物の持つ特殊な力を視線によって相手に伝えることが出来るというものである。仏陀は柔和な視線で物を見つめるとそれが質的变化を起こす。例えば、第56章の「ゴーパーラカ龍調伏物語」では、世尊は自らの視線によって、龍が吐き出す毒の水を清浄なものへと変えたとある。

prasannālokanasudhābandhunā snigdha cakṣuṣā /
sa nināyāṣu saviṣaṃ viṣaṃ nirviṣatām iva // (56.11)

慈愛にみちた甘露のような視線と結びついた、柔和な目をもって、
彼(世尊)はあつという間に毒のある水を毒のないものへと変えられたかのようであった。

sā duṣṭabhujagotsrṣṭā vṛṣṭir dṛṣṭyaiva tāyinaḥ /
yayau bālānilollāsasatkusumavarṣatām // (56.18)

凶暴な龍から吐き出された雨は仏陀の視線だけで、
新風の輝きで光り輝く花の雨となった。

このように怒った龍から吐き出された毒水は仏陀の慈愛に満ちた視線だけで無害の物へと質的に変化し

てしまうのである。

さらに、仏陀の視線は世の多くの生類の不安や悲しみを癒し、解消する効力があるとされる。第57章の「仏塔物語」では、あちこちに仏陀が慈しみて柔和になった視線を投げかけることによって、あらゆる生類は悲しみ、迷妄、恐れがなくなった、とある。

iti bhagavataḥ sthāne sthāne **dayādravilokanād**
abhavad akhilo lokāḥ śokapramohabhayojjihitāḥ / (57.16ab)

このように世尊があちこちに慈しみて柔和になった視線 [を投げかけられること] により、世間の全ては悲しみ・迷妄・恐怖がなくなった。

仏陀の視線はこの世の存在ばかりではなく、神々の王たるインドラにさえ、神の不安を解消する力があるとされる。第78章の「シャクラの死没の物語」には、仏陀の愛情あふれた視線はインドラ神の苦悩に対してさえ有効であると強調される。同章の冒頭の第1句に次のようにある。

uttuṅgaśṛṅgam adhirohati kautukasya
teṣāṃ prabhāvamahimā mahatāṃ mahārhaḥ /
ye pātayanty aśivasamśamanapragalbhām⁷⁾
dṛṣṭim dayāpranayinīm tridaśeśvare 'pi // (78.1)

三界の主宰神（インドラ）に対してすら、憐れみと愛情あり、[彼の] 不幸を鎮めることに熱意ある視線を落として下さる偉大な人（仏）という方の大きな尊敬に値する威力の偉大さは、驚異の高い頂点に昇る [ほどである]⁸⁾。

天界からの死没の兆候を見たインドラは苦悩し、仏陀に会って救いを求める。洞窟で火定界に入っておられた仏陀は目覚めると、インドラ神に会い、彼に恩恵を授けられた (**prasādam vidadhe**)。インドラ神は真理を見ると、「法の眼」となった (**dharmacakṣur bahūva saḥ**)。死の兆候が消えたインドラは仏陀に帰依する。仏陀の視線はインドラの不幸 (**aśiva**) を鎮めることができるのである。

第二に、仏陀の視線を受けた者は心に浄信を抱き、さらに仏陀のダルマの説示を受けて、真理を見、心が浄化される。第93章の「スマーガダー物語」は、仏陀への信愛 (**bhakti**) を抱く在家の女性信者スマーガダーを主人公とするものである。彼女は嫁ぎ先の都の人々が異教徒しかいないのを嘆き、釈尊や仏弟子たちを呼び寄せ、彼女の嫁ぎ先や都の住民たちを仏への信仰へと導いていく。ここでも仏陀の視線が重要な役割を果たす。彼女は視線で彼女に触れるよう仏に請う。

tvatpādapadmayugalaṃ śaraṇaṃ prapannāṃ
dūramsthitāṃ api **dṛśā sprśa** mām dayālo / (93.38ab)

憐れみ深い方よ、遠くにいらしても、貴方様の一對の蓮華の両足に帰依しています私に、[あなたの] 視線でお触れ下さい⁹⁾。

高弟たちに続いて彼女のもとを訪れた世尊はスマーガダーから供養を受けられると、仏陀の視線を注いで彼女らに浄信を賦与する。

sumāgadhāyā dayayā dayāluḥ
pūjāṃ grhītvā bhagavān sasaṅghaḥ /
anugrahālokanasamvibhāgaiḥ
sabāndhavāyā¹⁰⁾ vidadhe prasādam // (93.80)

憐れみ深い方である世尊は、スマーガダーへの憐憫によって、僧団と共に供養をお受けになった。

恩恵の視線を分け与えることで、彼女と親族たちに浄信を賦与された。

仏陀の視線がもたらす効果は人々の浄信であり、この気持ちにより彼らは仏陀のダルマの説示を受け入れる心の準備が整う。その結果、

sumāgadhā saśvaśurādivargā

sahāparaiḥ pauraṅgāni ca sarve¹¹⁾ /

śāstus tayā deśanayā babbhūvuḥ

śuddhāśayās tatkṣaṇadr̥ṣṭasatyāḥ // (93.81)

スマーガダーと舅などの〔家族の〕集まり、都の他の住民たちを伴うすべての者たちは、師のその（ダルマの）説示により、その刹那に真理を見て、心が清らかとなった。

仏陀の視線→スマーガダーたちに浄信が生じる→仏陀によるダルマの説示→彼らに清らかな心が生じる。あるいはただ単に心が洗われるだけでなく、より一層信者としてサンガに尽くす布施行を実施する場合もある。第35章の「ゴーシラ物語」では、世尊が「慈愛で柔和になった視線でゴーシラを見られ、彼を「智慧の器」にされた。智慧を得たゴーシラは、真理を見ることが出来、善を発揚させ、カウシャンピーの地に僧院を建立した、とある。

teṣu yāteṣu sudhanam pakṣapātārdrayā dr̥ṣā /

vilokya bhagavān samyag vidadhe jñānabhājanam // (35.52)

satyasamdarśanāvāptaviśeṣakuśalodayaḥ /

gatvā jināya kauśāmbhyāṃ sa vihāram akārayat // (53)

彼らが〔善趣に〕行くと、世尊は〔スダナへの〕深い愛情で柔和な視線でスダナを見られ、〔彼を〕正しく「智慧の器」とされた。

真理を見ることによりあらゆる善の発揚を得ると、

カウシャンピーに行つて、勝者のために精舎を建立させた。

ここでは仏陀の視線→スダナは真理を見る智慧を得る→真理を見て、善を行う→精舎を建立という順になる。

第三は仏陀の視線が相手の出家を促す効果をもたらすものである。第27章の「シュローナコーティーヴィンシャ物語」に、仏陀が慈悲に満ちた視線をシュローナコーティーヴィンシャに投げかけ、彼に教えを説かれると、彼はその教えから有身見を打破して、預流果に到達したとある。彼は自然と髪や髭が落ち、出家者の姿となる。

upaviṣṭasya tasyāgre hr̥ṣṭasyālokanāmṛtaiḥ /

cakre śamavivekasya bhagavān abhiṣecanam // (27.44)

目の前に歓喜して座っている、

寂静の判別智ある彼に、世尊は**甘露のような視線**を注がれた。

āśayānuśyaṃ dhātum prakṛtiṃ ca vicārya saḥ /

satyasamdarśanāyāsya vidadhe dharmadeśanām // (45)

心の動きや執着心、感覚機能、本性を吟味され、

彼（仏陀）は彼に真実を示すため、ダルマの説示をされた。

satkāyadr̥ṣṭisailo 'sya tayā viṃśatīr̥ṅgavān /

jñānavajreṇa nirbhinnāḥ srotahprāptipadaspr̥ṣāḥ // (46)

二十の頂のある有身見の山が、その〔説示〕により、

金剛のごとき智によって打ち砕かれると、この者は預流果を会得する境地に到達した。

pravrajyāyāṃ tanau (tatas)¹²⁾ tasya jātāyāṃ sahasā svayam / (47ab)

彼の身体は突然、自ずから出家の状態となった。

ここでは、仏陀の視線→ダルマの説示→有身見の山の破碎と預流果の到達→出家、という順番となる。第62章の「ヤショーダ物語」では、仏陀が恩恵のため柔和になった視線でヤショーダを見られると、

世尊は微笑んで、彼が今夜、世尊のもとで出家するであろうと予言された、とある。実際ヤショードは腐乱した女性の遺体を見、さらに夜、だらしなく眠りこけた女性たちを見、世の無常を感じると世尊のもとを訪ね、出家を希望した。

taṃ triḥ pradakṣiṅkrītya tatpādanalinadvayam /
sa vavande prasādārdraḍṣā tenāvalokitaḥ // (62.50)

彼（世尊）の蓮華のような両足に三度右回りの礼をなして、
彼（ヤショード）は彼（世尊）によって恩恵で柔和になった視線で見られると、[別れの] 挨拶をした。

bhikṣum aśvajitaṃ prāha bhagavān atha sasmitaḥ /
eṣo 'ntike 'dya me rātrau kumāraḥ pravrajisyati // (52)
アシュバジット比丘に世尊は微笑みながら言われた。
「この童子は今夜私の許で出家するであろう」と。

ここでは世尊の視線→アシュバジットへの童子の出家の予言という構図になる。

いっぽう、最終的に出家する前に、仏陀を供養し、誓願を立て、それが成就するケースもある。第61章の「農夫の物語」では、貧乏なバラモン、スヴァスティカは農耕に従事していたが、妻と共に世尊を供養しようと、彼の許に行く。農夫は妻に以下のように言う。

eṣa padmapalāsākṣaḥ kṣipaty āpannabāndhavaḥ /
yatra yatra ḍṛṣaṃ jāne tatra tatrāśayaḥ śriyaḥ // (61.12)

「この蓮華の花弁のような眼をされた [世尊は]、近づいた友の、
誰であれ、[その人に] 視線を落とされると、その人には幸運の抛り所が生まれる、と私は知っている。」

これを聞いた妻は世尊のために清浄な料理を用意した。世尊が供養を受けられると、バラモンは以下のような誓願を立てる。

vyaktadāridryaduḥkhasya bhūyān me vibhavodbhavaḥ /
cakāra jinapūjānte prañidhānam iti dvijaḥ // (15)

「私は明らかに困窮で苦しんでいます、[私に] より多くの富の出現がありますように。」
という誓願を勝者への供養の終わりに、バラモンは立てた。

彼の誓願通りに小麦や大麦の若芽が黄金に変わった。彼はより一層仏陀を首とするサンガを供養した。世尊のダルマの説示により、彼は預流果を成就し、最終的に阿羅漢の状態となった。以上の流れをまとめると、バラモンが供養のために仏陀に近づく→仏陀は視線を彼に向ける→仏陀は供養を受納→バラモンの誓願→誓願通りになる→バラモンは預流果を成就→阿羅漢の境地に至る。

3. Divy における視線の有無

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』（Divy）は根本説一切有部律を中心に幾つかの説話を抜き出し、また他からも説話を借用して、「黒白業」を意識しながら、十世紀前後、西北インドにて編纂された説話集である¹³⁾。

この説話集では、Avk と同じ根本説一切有部と深い関係を持ちながらも、仏陀の視線を強調する表現は見当たらない。典型的な流れとして、第四章の「バラモン娘の物語」（brāhmaṇadārikāvadāna）を例示する。

① 仏陀の素晴らしい姿を見る。

バラモンの娘は三十二の偉人の相で装飾され、八十種好で肢体は輝き、一尋の光明で飾られ、千の

太陽を凌駕する輝きあり、動く宝の山のような、どこから見ても吉祥な世尊を見た。(adrākṣīt sā brāhmaṇadārikā bhagavantam dvātriṃśatā mahāpuruṣalakṣaṇaiḥ samalamkṛtam aśṭīyānuyvañjanair virājitaḡātram vyāmaprabhālamkṛtam sūryasahasrātrekaprabham jaṅgamam iva ratnaparvatam samantato bhadrakam / (Divy p. 41, ll. 3-4)¹⁴⁾

- ② 浄信が起こり布施する¹⁵⁾。

見ると同時に彼女は次のように考えた。「…省略…『もし私から麦焦がしの施物をお受け取りになられるなら、私はあの方に与えましょう』と」。(saha darśanād asyā etad abhavat ... yadi mamāntikāt saktukabhikṣām pratigrhṇīyāt, aham asmai dadyām iti / ll. 5-7)

- ③ 世尊は彼女の心を [ご自身の] 心でお知りになり、[彼女に] 鉢を差し出される。(tato bhagavatā tasyās cetasā cittam ājñāya pātram upanāmitam / ll. 7-8)

- ④ 彼女により大きな浄信が生じる。「世尊は私の心を [世尊の] 心でお知りになられた」と知ると、激しい浄信を伴って世尊に麦焦がしの施物を布施した。(tato bhūyasyā mātrayā tasyāḥ prasāda utpannah / jānāti me bhagavāṃs cetasā cittam iti viditvā tūvreṇa prasādena bhagavate saktubhikṣām dattavatī / ll. 8-10)

- ⑤ 仏陀の記別。

[世尊は言われた。]「アーナンダよ、あのバラモンの娘はその善根によって、十三劫の間 [悪趣に] 墮ちることはないであろう。そうではなく、神々、人間界に流転し輪廻した後、最後の生において、最後の住処において、最後の誕生、最後の身体において、スバルニヒタという名の独覚になるであろう。」(asāv ānanda brāhmaṇadārikā anena kuśalamūlena trayodaśa kalpān vinipātam na gamiṣyati / kiṃ tarhi devāṃs ca manuṣyāṃs ca saṃvācyā¹⁶⁾ saṃsṛtya paścime bhave paścime nikete paścime samucchraye paścima ātmabhāvapratiḡambhe suparṇihito nāma pratyekabuddho bhaviṣyati / p. 43, ll. 1-4)

以上の構図では仏陀の視線は登場しない。仏陀は教化すべき相手の心を自らの心でお知りになり、教化の行動に移られるのである。

スバルニヒタ独覚の記別に怒りを覚えた彼女の夫は、世尊との会話で、浄信が生じた。その後、世尊は彼の性質・気質・性格・本性を知ると、四聖諦に通達させるような、相応しいダルマの説示をされた。それを聞くと彼は二十の頂が聳える有身見の山を智の金剛で粉碎し、預流果を証得した¹⁷⁾。彼は仏・法・僧に帰依し、信者となることを表明する。(atha sa brāhmaṇo 'bhīprasannah / tato 'sya bhagavatā āśayānuśayam dhātum prakṛtīm ca jñātvā tādrṣī caturāryasatyasampravedhikī dharmadeśanā kṛtā, yāṃ śrutvā brāhmaṇena viṃśatisīkharasamudgatam satkāyadrṣṭīśailam jñānavajreṇa bhittvā srotaāpattiphalaṃ sāksātkṛtam, p. 44, ll. 7-9)

先の「世尊がご自身の心で相手の心を知る」という表現は、その他第6章 (p. 48, ll. 31-32) に「その優婆塞の心を [ご自身の] 心でお知りになると」(tasya copāsakasya cetasā cittam ājñāya) とある。さらに第9章でも、バラモンの娘が嫁ぎ先のパドランカラ都城の上から暗闇に佇む釈尊を見、階梯があれば燈明をもって降りて行けるのに (yady atra sopānaṃ syāt, ahaṃ pradīpam ādāyāvatareyam iti) と考えた。その時、世尊は彼女の心を [ご自身の] 心でお知りになり、階梯を化作された (tato bhagavatā tasyās cetasā cittam ājñāya sopānaṃ nirmītam / p. 79, ll. 25-26), とある。

相手の心を知ることが出来るのは仏陀に限らない、第7章では、具寿カーシュヤパ、独覚も心で心を知ることが出来るのである。

具寿カーシュヤパは彼女の心を [自分の] 心で知って、[托鉢の] 鉢を差し出した。(tata āyusmatā mahākāśyapena tasyās cetasā cittam ājñāya pātram upanāmitam, p. 52, l. 7)

するとあの独覚はその貧しい人の心を [自身の] 心で知ると、[托鉢用の] 鉢を差し出した。(tato 'sau pratyekabuddhas tasya daridrapuruṣasya cetasā cittam ājñāya pātram prasāritavān, p. 55, ll. 30-31)

あるいは神々が世尊の御心を心で知るという表現もある。

さて、インドラやブラフマーを始めとする神々や何十万という神々は、**世尊の御心を〔自身の〕心で知ると**、あたかも力士が折り曲げた腕を伸ばし、あるいは伸ばした腕を折り曲げるように、インドラやブラフマーを始めとする神々と何十万という神々は天界から消えると、世尊の前に現れた。（*atha śakrabrahmādayo devā anekāni ca devatāśatasahasrāṇi bhagavataś cetasā cittam ājñāya tad yathā balavān puruṣaḥ saṃkuñcitam vā bāhuṃ prasārayet, prasāritam vā saṃkuñcayet, evam eva śakrabrahmādayo devā anekāni ca devatāśatasahasrāṇi ca devaloke 'ntarhitāni, bhagavataḥ puratas tasthuḥ / p. 100, ll. 4-6*）

5. 終わりに

以上のように、仏陀の視線が向かう相手に大きな役割を果たす記述は、ヴェーダにその起源を持ち、ヒンドゥー教にあっても大きな役割を果たしている。怒りの心であれ、慈しみの心であれ、視線は大きな効力を相手に及ぼすのである。視線と共にマントラを称えと、その効力はより増大する。

仏教においても、その記述は部派仏教に限らず、大乘仏典にも認めることができるが、仏典全体、あるいは特定のある部派に特有というわけでもなく、それを強調する文献と、「相手の心を自らの心で知る」という定型句を用いる文献もあることが分かった。この観点からさらに他の文献も渉猟しながら、仏陀の教化方法の類型について考察していきたい。

注

- 1) ページ数、次いで行数を表す。
- 2) Gonda [1969: 6].
- 3) Gonda [1969: 16, 39].
- 4) Gonda [1969: 17].
- 5) Gonda [1969: 25–26].
- 6) Gonda [1969: 44–46].
- 7) 原文は *ye pātayanty asīrasaṃ śamanapragalbhām* であるが、岡野[2011: 170]に従い、*ye pātayanty asīvasaṃśamanapragalbhām* と読んだ。
- 8) 訳は岡野 [2011: 170] を参照した。
- 9) 訳は岡野 [2017: 18] を参照した。
- 10) 原文は *sarvānavavāyā* であるが、岡野 [2017: 37] に従い、*sabāndhavāyā* と読んだ。
- 11) 原文では *sarvāh* であるが、ここでは岡野 [2017: 37–38] に従い、*sarve* と読んだ。
- 12) 原文は *tatas* であるが、ここでは de Jong [1996: 69] に従い、*tanau* と読んだ。
- 13) 平岡 [2007: ii–iii]、岩本 [1978: 149–153]、尚当該文献の訳は平岡 [2007] を参照した。
- 14) 同様の表現は第 6 章 (p. 47, ll. 7–9; p. 47, l. 32 – p. 48, l. 2) を参照。
- 15) 釈尊の偉大な姿を見ると、浄信が生じるという表現は第 18 章にも認められる。スマティという青年層が美しい姿をされた世尊を拝見すると、激しい浄信が生じたとある (*sumatīr mānavo bhagavantam asceṇakadarśanaṃ dṛṣṭvā atīva prasādajātaḥ / p. 155, ll. 14–15*)。
- 16) 平岡 [2007: 150, (19)] を参照。
- 17) 同様の表現は、第 6 章 (p. 47, ll. 20–24)、第 9 章 (p. 79, ll. 28–30) を参照。

参考文献

- Avk: *Avadāna-kalpalatā of Kṣemendra*. Edited by P. L. Vaidya. 2 vols., Buddhist Sanskrit Texts, No. 22, 23, 1959, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Divy: *Dīvyāvadāna*. Edited by P. L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Texts, No. 20, 1959, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Sps: *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. Edited by H. Kern and Bunyu Nanjio. Bibliotheca Buddhica x, (1908–1912), 1977, Tokyo: Meicho-fukyu-kai.

Gonda, J. 1969: *Eye and Gaze in the Veda*. Verhandelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, Afd. Letterkunde. Nieuwe Reeks- Deel 75, No. 1, Amsterdam.

岩本裕 1978 : 『佛教説話研究 第1巻 改定増補 佛教説話研究序説』開明書院.

岡野潔 2011 : 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究(2)—Śakracyavana, Mahendrasena, Pretikā の説話—」『南アジア古典学』6 : 165-266.

岡野潔 2017 : 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究(7)—第93章 Sumāgadhā 及び TJAM 第13章—」『南アジア古典学』12 : 1-91.

平岡聡 2007 : 『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上, 大蔵出版社.